



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	李贄と焦竑
Author(s)	松川, 健二
Citation	北海道大学人文科学論集, 18, 1-10
Issue Date	1981-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34360
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_PR1-10.pdf



李贄と焦竑

はじめに

海内存知己 海内 知己存し

天涯若比鄰 天涯 比鄰の若しと

古人聊自遣 古人 聊か自遣するも

此語総非真 此の語は総べて真に非ず

問学多奇字 学を問へば奇字多く

観書少斲輪 書を観れば斲輪少し

何時策杖履 何れの時か杖策き履きて

共醉秣陵春 共に秣陵の春に酔はむ

李贄（一五二七〜一六〇二）が、焦竑（一五四〇〜一六二〇）の手

紙を受け取り、詠じた一首である。第一聯は王勃「杜少府之任蜀州」

詩中の句。秣陵は、ほぼ今の南京市に当り、焦竑の出身・退隱の地。

松川 健二

この一首、かゝる既成価値へのあからさまな不信の表白は、作者李贄が焦竑を真の知己、自己の学問の真価を知悉して呉れている人として意識し、他者からの孤立を自覚することによって、その強さを増していると言えよう。一方、焦竑が李贄を「聖人の第二席」に推した、とは余りにも有名な話柄である。本稿ではこの詩の作られた背景の解明を目指しつつ、この両巨人の交情の跡を辿っておこうと思う。

(一)

李贄と焦竑の出合いを語るには、李贄の次の文を一覧するに如くはない。

李宏甫曰、余至京師、即聞白下有焦弱侯其人矣、又三年、始識侯。既而徙官留都、始与侯朝夕促膝窮詣彼此實際。夫不詣則已、

詣則必爾、乃為冥契也。故宏甫之學雖無所授、其得之弱侯者亦甚有力。夫侯千古人也、世之願交侯者衆矣。其為文章欲以立言則師弱侯、為制科以資進取、顯功名不世之業則師弱侯。又其大者則曰、是啜菽飲水以善事其親者也、是立德也。故世之為不朽故以交於侯者、非一宏甫也、然惟宏甫為深知侯、故弱侯亦自以宏甫為知己。万曆十年春、是為侯家人後渠八十之誕。先是、九年冬、侯以書來曰、逼歲当走千里、与宏甫為十日之飲。已而果然、飲十日而別。

以上は「寿焦太史尊翁後渠公八秩華誕序」(『統焚書』卷二)の書き出しの部分であるから、竝を替めるのに不思議はないが、贊の竝への傾倒ぶりがよく現れる資料であり、出会いから万曆十年までに言及していることで、第一に掲げたのである。

宏甫は李贄の号、弱侯は焦竑の字。贊が「京師に至つた」のは、嘉靖四五年丙寅(一五六六)四〇歳、礼部司務に補せられたとき、「官を留都に徙した」のは、隆慶四年庚午(一五七〇)四四歳、南京刑部員外郎となつたときだった。以降万曆一〇年までの主要な足跡を補えば、万曆五年丁丑(一五七七)五一歳、雲南姚安の知府となつて赴任、万曆九年辛巳(一五八一)五五歳、黄安に至り居住、ということになる。南京―姚安―黄安の間の、李贄と焦竑の交情のさまを知るに足る焦竑の側からの資料を順次掲げてゆこう。

読書不識字

宏甫為南比部郎、日聚友講學。寮友或謂之曰、吾輩読書、義理豈有不明而事講乎。宏甫曰、吾輩以高科登仕籍、豈不読書。但

苦未識字、須一講耳。或怪問其故。宏甫曰、論語大学、豈非君所嘗読邪。然論語開卷便是一字字、大学開卷便是大学二字。此二字吾敢道諸君未識得、何也。此事須有證驗始可。如識論語中文字便悅樂不慍、識大学二字便定靜安慮。今都未能、如何自負識得此字耶。其人默然不能對。^③

比部は刑部のこと。南京時代の贊の問學態度の一端を竑はこのように記録しているのである。

昔我從結髮 昔 我れ結髮せしより
翩翩恣狂馳 翩翩 恣に狂馳し
凌厲問學場 問學の場に凌厲たりて
志意縱橫飛 志意 縱横に飛び
慷慨思古人 慷慨して古人を思ふに
自謂不足為 自ら謂らく 為むるに足らずと
世俗薄朱顏 世俗 朱顏を薄くし
容華翻見嗤 容華 翻つて嗤はるるに
中原一顧盼 中原 一たび顧盼し
千載成相知 千載 相知と成る
相知今古難 相知 今古難し
千秋一嘉遇 千秋 一嘉遇
而我狂簡姿 而るを我が狂簡の姿にして
得蒙英達顧 英達の顧を蒙るを得たり

肝膽一以披 肝膽一たび以て披けば
形迹非所驚 形迹は驚むる所に非ず
嫵婉四載餘 嫵婉たり四載余
听夕長歡聚 听夕に長く歡び聚る
歡聚從今日 歡び聚ること今日よりし
交誼跂前賢 交誼 前賢を跂まん
況君秉淵尚 況んや君は秉ること淵尚
矢志羲皇前 矢志 羲皇の前なるをや
順性奚矯迹 性に順はば奚ぞ迹を矯めん
得道乃忘筌 道を得れば乃ち筌を忘る
慚予非鍾期 予の鍾期に非ざるを慚づ
何以発清弦 何を以て清弦を發せん
清弦中座興 清弦 座興に中り
音微振蒙鄙 音微 蒙鄙を振し
冷冷曲方調 冷冷 曲方に調ふに
弦絶自今始 弦絶 今より始る
山川一間之 山川 一たび之を問つれば
相去忽千里 相ひ去ること忽ち千里
念我平生歎 念へ 我が平生の歎
繾綣不能已 繾綣 已む能はざるを
繾綣無終極 繾綣 終極無きも
行役自有期 行役 自ら期有り
君子善尺蠖 君子善く尺蠖たれ

大道固委蛇 大道 固より委蛇

所貴志有行 貴き所は志の行はるる有るなり

豈云繼塵羈 豈に云はんや塵羈に繼がると

行行善自愛 行行 善く自愛し

無為怨天涯 ④ 為に天涯を怨む無かれ

「慷慨思古人、自謂不足為」と言い「而我狂簡姿、得蒙英達顧」と言う句のみを見れば、李贄の科白かと錯覚を起すほどで、三八歳の焦竑の自負が読みとれて面白い。

次も同じく焦竑の「李宏甫解官卜築黃州寄贈」。もとより黃安に住むようになった李贄へ贈ったもの。

夜郎三載見班春 夜郎三載 見れて春を班ち

又向黃州学隱淪 又 黃州に向きて隱淪に学ぶ

說法終憐長者子 法を説きては終に憐れむ長者の子

隨緣一見宰官身 緣に随ひては一たび見す宰官の身

門非陳孟時投轄 門は陳孟に非ざるも時に投轄せよ

鄉接康成不買鄰 郷は康成に接して郷を買はざらん

苦欲移家難自遂 ⑤ 苦に家を移さんと欲するも自らは遂げ難し

何時同作灌園人 何れの時か同じく灌園の人と作らん

第二聯によつて、焦竑が李贄との共通の立脚基盤として仏教を意識していることがわかる。

次も退官後の時点で、李贄の進退に關しての焦竑の見解がよく表れている資料である。

宏甫書高尚冊後

宏甫解組婦。巡台劉君彙薦紳贈言為冊、題之曰高尚。宏甫寓言

於天台楊子、作文一首書其後、其平生大都具矣。天台楊子曰、

吾讀劉君高尚諸篇、而益信宏甫之不可知也。或曰、宏甫隱於禪

者也。夫宏甫年已五十四矣。自三十登仕、歷七任而至郡守、辛

苦跋涉以至若斯之年、亦既倦而後去耳。使其先四歲而死、亦已

不称夭矣。幸而不死而又博高尚之名以去、不為宏甫氏、其終不

去乎。且高尚之名、非有道之所處也。仲尼嘗比之匏瓜之固矣、

曾謂宏甫而不聞之乎。夫大道無高、有高則有過。至人無尚、有

尚則有累。渠既深於是、而猶以過自累也、安在其為知道歟。噫、

是非或人所知也。夫宏甫非高尚之士也、而未始非高尚之士也。

而与以高尚之名、則受之矣。且天下之物亦無一而非累也。苟不

以物累心、則終身役一官、雖三黜之而不去可也。及其所之既倦、

則或四五十、或六七十、辭而去之可也。与之名当其実可也、与

之実而不當、亦無不可者。若慕高尚之名而後去、去矣、而又嫌

於有其名、皆累也、子何区区於名実之間、揣量而校度之、而欲

以議至人之出処、不亦左歟。^⑥

竝は、俗人の判断基準を嗤いつつ、賛を「至人」と言つて憚らない。

賛にとつて竝は眞の知己であつたのである。

(二)

黄安に居住するようになった李賛は、前出資料の如く万曆九年冬、
焦竑と「十月之飲」をなして別れた。その後の交情を語る為、次の

詩を取上げてみる。

李如真四月二十六日書到黄安、知兄已到家感器待時、最喜最喜。

此時正熱、稍涼不知便可乘興扁舟入楚不。得一相見、快矣何如。

如真相見、想悉旅懷。当接到兄京信時、時夜雷雨、山中偶感事

作二絶句、便去、亦可以見古今豪賢之感也。

秣陵人去帝京遊 秣陵の人 帝京に去つて遊ぶ

可是隋珠復暗投 是れ隋珠を復た暗に投ぜしものなる可し

昨夜山前雷雨作 昨夜山前に雷雨の作れり

伝君一字到黄州 君に伝へよ 一字黄州に到れりと

独步中原二十秋 中原に独歩すること二十秋

劍光長射斗間牛 劍光長へに射る斗牛の間

豊城久去無人識 豊城久しく去つて人の識る無く

早晚知君已向頭 早晚に君已に白頭なるを知らん

この二絶は『続焚書』巻五に「感事二絶寄焦弱侯」として載せられ
ているが、前の一首は『焚書』巻六にも「山中得弱侯下第書」と題
して載せられている。焦竑の会試下第は、容肇祖「焦竑及其思想」

〔燕京学报〕第三三期によれば、二六歳、二九歳、三二歳、三八

歳、四四歳の五回（五〇歳、中式進士第一名）ということ、この

詩は李賛五七歳、焦竑四四歳（一五八三）のときのものとして推される。

詮索はさておき焦竑の身辺を気づかう李賛の熱い友情が伝ってくる

のである。

さて麻城へ移る切掛についていささか触れよう。三袁の末弟、中
道に「李温陵伝」があるが、言う。

子庸死、子庸之兄天台公惜其超脱、恐子姪効之有遺棄之病、数至箴切。公遂至麻城竜潭湖上、与僧無念、周友山、丘坦之、楊定見聚、閉門下鍵、日以読書為事。

子庸とは李贄の知己として焦竑と竝ぶかの耿定理（一五三四～一五八四）の字、贄が黄安に退隱したのもこの定理を頼つてのことであつて、定理の死は贄に大きな影響を与えた。『統焚書』卷一、「与弱侯焦太史」では、

此間自八老去後、寂寥太甚、因思向日親近善知識時、全不覺知身在何方、亦全不覺欠少甚麼、相看度日、真不知老之將至。蓋真切友朋、生死在念、万分精進、他人不知故耳。自今實難度日矣。

と言う。文中「八老」とは定理を指す。「自今實難度日矣」とは、いま一人の知己としての焦竑への述懐であればこそ一層の緊張感を漂わすのである。

麻城での李贄の生活についても、引続き袁中道「李温陵伝」の描写に俟とう。

公氣既激昂、行復詭異、斥異端者日益側目。与耿公往復弁論、每一札累累万言、發道學之隱情、風雨江波、読之者高其識、歛其才、畏其筆。始有以幻語聞当事、当事者逐之。

「耿公」とは前出耿定理の兄、耿定向（字在倫、号楚侗。人、天台先生と称す。一五二四～一五九六）のこと。定向は、竑にとっては師に当たっていることを考え合せておきたい。ともあれこの間『焚書』が万曆一八年（一五九〇）に刊行されているが、この『焚書』の内

容といへば、贄自ら竑に当てた書簡に、

更有一種、專与朋輩往来談仏乘者、名曰李氏焚書、大抵多因縁語、忿激語、不比尋常套語。恐覽者或生怪憾、故名曰焚書、言其当焚而棄之也。^⑩

と言うが如きものであつたから、「幻語」と看做されたのも当然であつたのである。

(三)

「李温陵伝」は、次いで言う。

於時左轄劉公東星迎公武昌、舍蓋公之堂。自後屢歸屢游。劉公迎之沁水、梅中丞迎之雲中、而焦公弱侯迎之秣陵。無何、復歸麻城。

武昌で劉東星（一五三八～一六〇一）の庇護を受けたのは万曆一十九年（一五九一）六五歳のとき。この頃のものと思われる焦竑宛の書簡。

弟今又居武昌矣。江漢之上、独自遨遊、道之難行、已可知也。

歸歟之歎、豈得已耶。然老人無婦、以朋友為婦、不知今者當婦何所歟。漢陽城中尚有論説到此者、若武昌則往来絶跡、而況譚学。写至此、一字一淚、不知当向何人道、当与何人読、想当照旧薙髮歸山去矣。^⑪

ここでは、「老人無婦、以朋友為婦、不知今者當婦何所歟」の語に注目しておきたいと思う。劉東星の世話になりながら、心は遠く焦竑

に飛んでいるのである。

劉東星の出身地、山西の沁水に迎えられたのが、万曆二十四年（一五九六）七〇歳。梅国楨（一五四二—一六〇五）の任地、大同に迎えられたのが翌二五年。この年焦竑は順天郷試を主ったが、合格させた受験生九人の文に陰誕の語多しとして弾劾されるという立場に在った。恐らく此の頃であろう、李贄は梅国楨の言動に関して次のように焦竑に訴えている。

客生曾对我言、我与公大略相同、但我事過便過、公則認真耳。余時甚愧其言、以謂、世間戲場耳、戲文演得好和歹、一時綵散、何必太認真乎。然性氣帶得來是箇不知討便宜的人、可奈何。時時得近左右、時時得聞此言、庶可漸消此不自愛重之積習也。余時之答客生者如此。今兄之認真、未免与僕同病、故敢遂以此說進。^⑬

「容年譜」は、文中の「世間戲場」の發言を焦竑へのなぐさめと解するが、当っていよう。ともあれ李贄は焦竑との共通点として「認真」を意識し、連帶感を強めているのである。客生は梅国楨の字、克生。一方焦竑は李贄に対し麻城への帰還を促したことがあったようであるが、その誘いに対する反応は、次のように激越を極めた。

兄所見者向年之卓吾耳、不知今日之卓吾固天淵之懸也。兄所喜者亦向日之卓吾耳、不知向日之卓吾甚是卑弱。若果以向日之卓吾為可喜、則必以今日之卓吾為可悲矣。夫向之卓吾且如彼、今日之卓吾又何以卒能如此也、此其故可知矣。人但知古亭之人時時憎我、而不知実時時成我。古人比之美荻葉石、弟今実親領之

矣。

古亭は麻城。李贄はこのように自己の「卑弱」からの脱皮を揚言し、それも人に憎まれていればこそ、と開直るのである。書簡は続く。聞有欲殺我者、得兄分割乃止。此自感德、然弟則以為生在中国而不得中国半箇知我之人、反不如出塞行、死為胡地之白骨也。兄胡必勸我復反竜湖乎。竜湖未是我死所、有勝我之友、又真能知我者、乃我死所也。嗟嗟、以鄧豁渠八十之老、尚能忍死於保定傭夫之手、而不肯一食趙大州之禾、況卓吾子哉。与其不得朋友而死、則牢獄之死、戰場之死、固甘如飴也、兄何必救我也。死猶聞俠骨之香、死猶有烈士之名、豈竜湖之死所可比耶。大抵不肯死於妻孥之手者、必其決志欲死於朋友之手者也、此情理之易見者也。唯世無朋友、是以雖易見而卒不見耳。我豈貪風水之人耶。我豈坐枯禪、圖寂滅、專一為守屍鬼之人耶。何必竜湖而後可死、認定竜湖以為塚舍也。^⑭

鄧豁渠云々に就いては島田虔次「異人・鄧豁渠 略伝」^⑮参照。さて前段で「今日の卓吾を御存知ない」と言ったのは、実は自らの変貌ぶりを理解して欲しいとの訴えであったのである。そうして「朋友を得られずに死ぬことにくらべれば、牢獄・戦場の死は飴のように甘いだから救って下さるな」という中に、より甘き死所——焦竑の所在、即ち北京・南京への思慕が込められているのである。

九月、北京西山の極楽寺に寄寓。翌万曆二十六年戊戌（一五九八）春、焦竑と共に南京へ。この間の事情を李贄自身次のように述べる。老人之遁跡於竜湖也亦多年矣。……既不与世接、則但有讀書耳。

故或諷誦以適意、而意有所拂則書之、或俯仰以致慨、而所慨勃勃則書之。故至坪上則有道古錄四十二章書、至雲中則有孫子參同十三篇書、至西山極樂僧舍則有淨土訣三卷書。随手輒書、隨書輒梓、不能禁也。又有坡公年譜并後錄三卷、陳正甫約以七八月余到金陵來索。又有藏書世紀八卷列伝六十卷、在塞上日余又再加修訂、到極樂即付焦弱侯校閱、託為叙引以伝矣。今幸偕弱侯聯舟南邁、舟中無事、又喜朋盍、不復為閉戸計矣。^⑧

沁水から大同へ、そうして北京から南京へと足跡を述べるうち、焦竑を俟って『藏書』の刊行準備が進行している点は注目に値しようが、特に焦竑のお陰で「閉戸の計」を考える必要のなくなった李贄の心情そのものの变化を思うべきである。一方、焦竑は「今弱侯罷講官、余又与之連舟南行」^⑨と李贄の言うごとく、退隱の旅路だったのである。

「共に秣陵の春に酔ふ」ことを得た李贄の倡道のさまを、焦竑は、楊起元（号は復所、一五四七〜一五九九）のそれと比較しつつ次のように述べている。

当是時、溫陵李長者与先生狎主道盟、然先生如和風甘雨、無人不親、長者如絶壁巉巖、無罅可入。二老同得法於盱江而其風尚懸絶如此。余以為未知學者不可不見先生、不如此則信向靡從。既知學者不可不見長者、不如此則情塵不尽。天生此兩人、激揚一大事於留都、非偶然也。^⑩

罅は罅の譌。盱江とは江西南城の人羅汝芳（号近溪、一五一五〜一五八八）を指す。焦竑が李贄のきびしさを崇敬の念もて回想したの

に対し、李贄は退隱した庇護者焦竑の日常をどう捉えていたか。次は例の劉東星の息子用相への手紙の一部である。

尊公我所切切望見、公亦我所切切望見、何必指天以明也。但此時尚大寒、老人安敢出門。又我自十月到今、与弱侯刻夜読易、每夜一卦、蓋夜静無雜事、亦無雜客、只有相信五六輩弁質到二鼓耳。此書須四月半可完。……我謂公当来此、輕舟順水最便、百事俱便、且可以聽易開闊胸中鬱結。又弱侯是天上人、家事蕭条如洗、全不掛意、只知読書云耳。……若来、舟中多帶柴米。此中柴米貴、焦家飯食者六百余指、而無一畝之入、不能供我、安能飯客。^⑪

焦竑の人物が活写されていて実に面白い資料である。待望久しかった南京での生活にビリオドを打たねばならなかったのも、案外焦竑の経済状態に由るのかも知れぬ。

さて、「尊公」即ち劉東星は当時山東河漕総督であり、この返信の書き出しの部分から、李贄が当時劉氏父子によって濟寧へ来るよう招かれていたことが判るのであるが、二八年（一六〇〇）春には劉東星みづから南京に至り、濟寧へ伴った。『藏書』六八巻は、既に焦竑・劉東星・梅国楨等の序を付して二七年秋季に上梓されていた。

さてこの濟寧逗留も長くは続かず、間もなく麻城に戻ったことが、次の焦竑宛の書簡で知られる。

説法教主四字真難当。生未嘗説法、亦無説法処、不敢以教人為己任、而況敢以教主自任乎。唯有朝夕読書、手不敢釈巻、筆不敢停揮、自五十六以至今年七十四歳、日日如是而已。関門閉戸、

著書甚多、不暇接人、亦不暇去教人、今以此四字加我、真慚愧矣。……且夫聖人通天下以爲一身、若其人不宜居於麻城以害麻城、寧可使之居於本鄉以害本鄉乎。是身在此鄉、便忘却彼鄉之受害、仁人君子不如是也。既不宜使之說法爲教主於麻城、而令其說法爲教主於久去之鄉里、是重他鄉而藐視目前、亦又太遠於人情矣。此等見識皆生所不識、故敢与兄商之、以兄彼師也。^②

引用の後半から推すと、李贄は焦竑に「麻城に在っては、他郷ゆえに、心して說法などして教主となるようなことのないよう」注意されたものと思われる。「容年譜」に「他這信、説明有些人不願他住在麻城、故和焦竑說及」と解するのは當つていよう。李贄が何処に在るかを問わず、焦竑は李贄の自他共に許す後見人だったのである。それにしても、先に麻城に帰るよう促された時もそうであつたように、李贄は麻城がからむと焦竑に反撥するのだった。かかる李贄に対する麻城の人の憎しみは強く、間もなく逃げ出さねばならぬことになる。袁中道「李溫陵伝」は言う。

時又有以幻語聞當事、當事者又誤信而逐之、火其蘭若、而馬御史經綸遂躬迎之於北通州。又会當事者欲刊異端以正文体、疏論之。遣金吾緹騎逮公。

先の「幻語」に『焚書』が関つていたとすれば、此のたびの「幻語」には、万曆二七年既に南京で刊行されていた『藏書』が関係しよう。『藏書』の内容を李贄自ら焦竑に語るよう、

承諭、李氏藏書、謹抄錄一通專人呈覽。年来有書三種、惟此一種繫千百年是非、人更八百、簡帙亦繁、計不止二千葉矣。^③

「千百年の是非に繫る」判断基準を教主として独自に示されては、体制がもたぬ。この度の逮捕が獄中における自殺へと繫つたのであつた。

おわりに

李贄は万曆三〇年、七六歳、三月の逝世を前にして、その二月初五日「李卓吾先生遺言」（『統焚書』巻四）を認めた。埋葬への指示、詳細を極めた記述の終りに當つて言う。

周田裁以樹木、墓前立一石碑、題曰李卓吾先生之墓。字四尺大、可托焦漪園書之、想彼亦必無吝。

「遺言」の中に他人の人名が出てくるのは、最晩年の李贄に付添つた馬経綸の外は焦竑ただ一人であり、李贄にとつての焦竑の存在の大きさがわかるのである。

一方、焦竑はどうであつたか。『澹園集』卷三九に、「寄宏甫二首」と題する次の詩が見出される。

婦田仍作客 婦田 仍ち客と作り
散步自安禪 散步 自ら安禪せるに
去我無千里 我を去ること無しく千里
相違忽二年 相ひ違ひて忽ち二年
夢醒江閣雨 夢は醒む江閣の雨
心折楚雲天 心は折る楚雲の天
寥落知音後 寥落たり知音の後

愁看伐木篇 愁ひ看る伐木の篇

風雨秋偏急 風雨 秋 偏へに急

懷人鬢欲糸 人を懷へば 鬢 糸ならんと欲す

飄零違俗久 飄零 俗に違ひて久しく

歲月著書遲 歲月 書を著すこと遅し

独往真何事 独り往きて真に何にか事ふ

重過会可期 重ねて過ぐるも会するを期す可し

白門遺址在 白門に遺址在り

相為理茅茨 相ひ為に茅茨を理めん

最後まで焦竑は李贄を思いやったことが知られるのである。またその逝世に関しては次のようにも言う。

今歲宏甫以誣被逮死燕邸。余既不能奮飛、而相知者率陰拱而不肯援。使君而在、亦豈至此極也。^②

他方、李贄の著書の刊行に際し、焦竑の撰した序文四種を検討してみよう。一つは前述の「藏書焦序」、万曆二七（一五九九）^③。一つは「李氏焚書序」、「今焚後而宏甫之伝乃愈広。然則此書之焚、其布之有火流哉。宏甫曾以是刻商之於余、其語具載此中。余幸而後死、目擊廢興、故識此於其端云」と言うから、李贄の死後の版に寄せたもの。一つは「統藏書序」、万曆三九（一六一一）。一つは「李氏統焚書序」、万曆四六（一六一八）。もとより以上四種に批判めいた言辞のある筈もない。焦竑は終始、温く李贄を見守っていたと言える。ただ現行の『澹園集』（万曆三四年序刊）『澹園統集』（万曆三九年序刊）には、「藏書焦序」が見られない事実の外、李贄関連の資料と

言えば、本稿で扱った微々たる資料以外殆んど見出せないという事実注目しておかなければならぬ。現行の『焚書』・『統焚書』所載の、李贄から焦竑への書簡は二〇を超え、そのうち返書は四点を算える。少くとも「与李卓吾」四点が焦竑にあることになるが、一点も見出せない。名家焦竑の周辺、李贄に対する意識のありようと関連することかも知れぬ。

本稿冒頭に掲げた詩にしても、焦竑の書を得ての感慨であった訳であるから、李贄の心を揅ったその焦竑の書を一見したい思いに駆られるが、事情如何ともし難い。いずれ焦竑一流の温和な慰めの手紙でもあったろうか。それに触発されて、南京での再会を夢みたのであった。

註

- ① 「入山得焦弱侯書有感二首」その二。『統焚書』卷五。
- ② 李贄の足跡に関する年月の表示は原則として溝口雄三「李贄年譜」（平凡社、中国古典文学大系「近世隨筆集」一九七一年、所収「以降単に「溝口年譜」と称す」）に拠る。なお外に鈴木虎雄「李卓吾年譜」（『支那学』第七卷二号・三号、一九三四年、所収「以降単に「鈴木年譜」と称す」）、容肇祖「李贄年譜」（三聯書店、一九五七年「以降単に「容年譜」と称す」）の二種を参照した。
- ③ 『焦氏筆乘』卷四。
- ④ 『澹園集』卷三七。
- ⑤ 『澹園集』卷四一。
- ⑥ 『焦氏筆乘』卷二。
- ⑦ 『統焚書』卷一、「与焦弱侯」。
- ⑧ 『焚書』卷四、「耿楚侗先生伝」参照。
- ⑨ 註⑧に同じ。

- ⑩ 『焚書』卷一、「答焦澹園」。
- ⑪ 『焚書』卷二、「与焦澹園」。
- ⑫ 『焚書』卷二、「与弱侯」。
- ⑬ この書簡の書かれた時について「容年譜」は大同に在ったのとし「溝口年譜」は七一歳沁水に在ったのことにする。また七〇歳の時のことも推定する。(溝口雄三「焚書(抄)」平凡社、中国古典文学大系『近世随筆集』一九七一年、所収)
- ⑭ 『焚書』卷二、「与焦弱侯」。
- ⑮ 『吉川博士退休記念中国文学論集』所収。
- ⑯ 『統焚書』卷二、「老人行叙」。
- ⑰ 『統焚書』卷二、「選錄睽車志叙」。
- ⑱ 『澹園集』卷二二、「題楊復所先生語録」。
- ⑲ 『統焚書』卷一、「復劉肖川」。
- ⑳ 『統焚書』卷一、「与焦弱侯」。
- ㉑ 註⑩に同じ。
- ㉒ この詩、秋の作。李贄の逝世(万曆三〇年春を勘案すれば万曆二九年秋が下限となる。これより「相違忽二年」一二年を遡れば、万曆二七年秋。即ち『藏書』の刊行以後は、焦竑と李贄は逢っていないことになるのである。註⑲の興味ある書簡の時期を「容年譜」「溝口年譜」とともに万曆二七年冬としているが、ほぼ一年早めなければならぬことになる。
- ㉓ 『澹園集』卷三〇、「雪松潘君墓志銘」。
- ㉔ 山下竜二「李氏藏書について」(森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集所収)に、この焦竑の序を劉東星の序に対比しつつ焦竑の李贄に対する理解度の深さを論ずるところあり。